3a
810
明20

版權免許

INTAITOKUHOS

縣体

讀方書

大阪 前川書

塚原苔園撰

30246

教科書文庫

3
810
31-1887
20000
72754

3a
810
明20

自明治二十年二月廿三日
至仝二十五年二月廿三日 文部省檢定濟小學校教科用書

新体讀方書

大阪製本所　前川書房

資料室
大阪市立大学
教
12754
図書

新体讀方書卷三の上

東京　塚原苔園撰

○第一課

蝦夷、琉球、畿、函館、渡島、交易、札幌、

日本とハ我ゞ國の總稱なり○我ゞ國ハ本島、蝦夷、四國、九州、琉球の五つの島より成り立ちて又此れを五畿と八道とに分ちたり○八道とハ東海、東山、北陸、南海、山陽、山陰、西海、北海なり○九州と琉球とハ西海道

に屬し、四國ハ南海道に屬し、蝦夷ハをべて北海道に屬せり○五畿ハ道の中に府縣あり、府縣の下に郡區あり、郡區の下に町村あり○東京ハ武藏にあり、京都ハ山城にあり、大坂ハ攝津にあり、東京、京都、大坂を三府といふ○横濱ハ武藏にあり、神戸ハ攝津にあり、長崎ハ肥前にあり、新潟ハ越後にあり、函館ハ渡島にあり、横濱、神戸、長崎、新潟、函館を五港といふ、いづれも

外國人と交易をなす所なり○三府五港ゝ
つゞきたる我ゞ國の繁華の地ハ奈良、堺、和
歌山、名古屋、静岡、水戸、仙臺、金澤、敦賀、廣島、
下の關、博多、熊本、鹿兒島、高知、札幌等なり

○第二課

漁獵、利益、網、鮭、鱒、鱈、鯛、鰯、鯨、鰹、干鰯、煮、

我ゞ國のめぐりハ皆海なれゞ漁獵の利益
はなはゞ多し○故ゝ我ゞ國を富ますハ、よ
き網をつくり、よきしかけを發明して海

の魚を多くとり自國
の人の食料となし又
外國へ賣り出ざすゝ
あり○我ゞ國の海ゝて
取るゝ魚の中ゝて最
も利益あるものハ北
海道のゝしん、鮭、鱒、鱈。
上總の九十九里、下總の銚子の鰯、肥前の
五島の鯨などなり○又仙臺のまぐろ、土

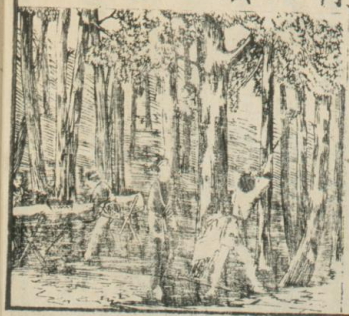
佐、薩摩の鰹も其取れ方甚ざおゝ〜○ま〜ん、ハ干〜て食料とし、鮭、鱒、鱈、ハ塩引とし、鰯ハ生まて食ひ又干〜て干鰯とす、干鰯ハ肥料のもつともよきものなり○鯨ハ其あぶらを取りてさまゝ〜の用まをなふ、鰹ハ生まて食ひ又其肉を干〜て鰹節とす○まゝ〜ん、鰯ハ又これ煎煮て油をとる、これを魚油といふ、ゐずの子ハまゝ〜んの子まり

○第三課

材、檜、槻、椎、樫、丸太、鋸、畧、質、變、

我ゞ國ハまさ山多けれど材木を出ざすことおびさゞ〜○この材木のうちもつとも多く世の用をなすものハ檜、さハら、杉、松、もみ、槻、桐、櫻、椎、樫、くのぎ、の類なり○木のまゝまる丸き材木を丸太といひ、四角まに木どりたる材角物といひ薄く鋸まてひきさる材板といふ○板のうちまも四分

板、六分板、一寸板、板ゴり、ぬき、などいろ〳〵あり○角物ハ皆寸尺を以て其名をよぶ、すなハち二寸五分角、三寸五分角、四寸角、五寸角、六寸角、尺角の類なり又二寸五分角を畧して二五分といひ三寸五分角を畧して三五分といふ○前ゝ



錦森閣蔵

云へる木のうちゝハ家を建つるゝ用ふる木あり器を作つくるゝ用ふる木あり其木の質ゝよりて用ひ方種々ゝ變れり

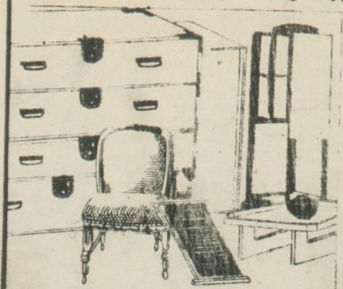
○第四課

樅、薪、鉢、筆筒、机、倚子、桶、俎、板、鋤、鍬、柄、曲物、膳、椀、行燈、燭、天城、

木の用ひ方のあらまゝを云へば檜、杉、松、樅、の類ハ家を作るゝ用ひ、さゝら、桐、槻、櫻、檜、杉、椎、樫の類ハ器をつくるゝ用ひ、くの

錦森閣蔵

ぎ、松ハ薪として用ふるなり○されど今日我々の用ふる道具のうち火鉢ハ桐或ハ槻を用ひ、簞笥、長持、本箱、机等ハ桐或ハ杉、檜、樅を用ひ、倚子ハ槻又椎を用ひ、桶、手桶ハ杉又ハさハらを用ひ、俎板ハ檜を用ひ、鋤鍬等の柄ハ椎、



錦林閣藏

樫を用ひ、下駄の臺ハ桐又ハ杉を用ひ、其齒ハ椎、樫、槻を用ふ○まさ曲物ハ杉、檜よて作り、膳、椀、行燈、燭臺の類そべて塗物の木地も杉ゝ檜を通例とす、我々の今讀む讀本の版木ハ櫻なり○我ゞ國よて材木を多く出ざす地ハ和州の吉野、野州の日光、遠州の掛塚、紀州の熊野、羽後の秋田、伊豆の天城、信州の木曾、其外ゟ又飛驒の材木ハ古へより名あり

錦林閣藏

○第五課

銅、鐵、鉛、錫、硫黃、鑛、貨幣、錢、卑、又、真鍮、反射爐、艦底、罐、砲、鑄、鋼、

前ニ云ヘる山々より又金、銀、銅、鐵、鉛、錫、石炭、硫黃の類を出ざす○此れ等の物の出づる山を鑛山といひ、其物を鑛物といひ、鑛物を堀り取る人を鑛夫といふ○諸種の金類の中ニて金は第一の貴きものとす、其次ハ銀ニして銅、鐵、鉛、錫ハ又此れニ次ぐものなり○金銀ニて貨幣をつくるハ其品の貴きと、其色の美しきお故なり○又銅ハさびること少なきもの故同じく銅錢として用ふるなり○鐵ハ其品卑しけれども其質の堅きと、其物の多きとニて又物、機械、器具ニつくり

錦森閣藏

さまゝの用に供ふ○真鍮とからかねとハ銅に錫鉛の類を交ぜてつくりしものなり故に此れ等を「まぜ金」といふ○金類を「とかす」ハ「吹ごたゝら」反射爐の類を用ふ、此うち反射爐ハ其仕掛もつとも大にして軍艦、蒸氣船の底にもちる鐵板、蒸氣罐、大砲などの大いなる物を鑄るに用ふるなり○鐵の最もこまきものを鋼鐵といひ、質の惡しきものを「づく鐵」といふ、又

物の物を切るハ鋼鐵あるに依てなり

○第六課

欲、兩替、帳場、勘定、店、警察署、憚、盜、眼、側、迷、耻、楊、震、

むかし或る欲ふかき男あり、しきりに金銀をかゝしぶりて、晝夜其事をのみ云ひ居さり○或る日町に行きさるに兩替屋にて多くの金銀を帳場にならべ勘定して居さる所見て、此男忽ち此店に走り入り、

右の金銀ばつゝみて去らんとせり○其店にハ大勢人も居さりしゝで此男ハ直につゝまりて警察署に引立られさり○警察の役人出でゝ此男にむゝひ其方ハ何故に白晝人の家に入り多くの人の見る前ばも憚からず盗みばし

さるぞと問ひけり○其時此男答て曰く私ハ此金ばつゝむ時金銀ばゝり眼に入りて側に居る人々ハ一向に見えざりし。といひさりとぞ○此話ハ欲深き人をいましめたる昔の「たとへ言」にて實にがゝる事のあり一にハあらず○然れども我が慾心に迷ふ時ハ直に人の見つくるゝも氣が附ゝず、惡事ばして、身を失ひ、恥をさらす者多くあり、此れを世に「慾に目ゝく

らむ」といふ、おそるべき事なり。此れよつき楊震といふ賢人の話あり次に記るすべし

○第七課

支那、周旋、足下、世話、折角、志、神、贈、戒、顯、濟、

昔支那に楊震といふ賢人あり。或る人この楊震の周旋にて役人になりしゐむ其禮にとて多くの金を持來りひそかに

楊震に おくりけり。其時楊震これを返して我等ハ足下の學問もあり、善き人なる故知りて、役人に世話したるなり、金故もらハんとて周旋したるにあらず。と云へり。其人又押返して、それハ左もあるべけれど此れハ我等が折角の志なり、唯受け納めておき玉へ、殊に今ハ夜中なれば外に誰も知る人なし。とまきりに金故取らん事故勸めさり。此時慾深き愚人な

らバ此金ハもらひ置くべきなれども楊震ハ賢人なれど色ハ正し。君ハ誰も知る人ふしと云てるれども、既ニ此事ハ、天ゞ知り、神ゞ知り、君ゞ知り、我ゞ知れり、なんぞ知る人なしと云ふべき。と云ひされど金ハ贈りし人大いニ耻て夫

りさりと云ふ○此れハ後世楊震ゞ四知の戒めとて内々ニてする惡事の直ニ世の中ニ顯てるゝ戒めとせり○凡そ世の中ニ惡事ハ一て顯てれずニ濟むといふ事ハ無きものなり

○第八課

珍重、珊瑚、鼈甲、珠、價、烟草、緒、簪、櫛、笄、飾、晶、裝、

金銀ニつゞきて世の人の珍重するハ珊

瑚、鼈甲の類なり○珊瑚ハ昔ハ珊瑚珠として玉石の類とーされども其實ハ珊瑚虫といふ海中ーすむ虫ーして下等動物の一種なり○珊瑚ハ多く外國より來る我ゞ國ーてハ土佐の海中ーて產す○珊瑚ーて赤きあり、紅なるあり、白きあり、

きものハ下品ーして紅なるもの、赤きものハ上品なり、其上品なるものハ金銀よりも價貴し○珊瑚ハもと煙草入の緒ドめ、婦人の簪の珠として用ふ○鼈甲ハ海龜の一種ーして「たいまい」といふ龜の甲なり○鼈甲ハ多く婦人の櫛笄として頭の飾とす、此も價貴きものーして櫛一枚、笄一本の價十圓二十圓ーて至るものあり○鼈甲、珊瑚、水晶、めなふ、其外をべて

物の飾となす品を裝飾品といひ、米、麥、銅、鉄、衣服等の實用品と區別せり

○第九課

冷、溫、器、暑、熱、度、肌、感、裸、觸、櫃、蒲團、氷

冬の日の寒しといふハ、我が体のまたりにある空氣の寒く冷るを爲めに、我が体溫の幾分を取り走らるゝ故なり○其道理ハぬるま湯をくみさる茶碗を、冷水をもりし器に入るれば其湯ハたちまち冷るに同じ○夏の日の暑しといふハ、我が体のまたりにある空氣の熱さ、我が体溫よりも其度を増して、我が肌にあつく感ずる故なり○其道理ハ熱き湯をくみたる茶碗を、熱き湯をもりし器に入るれば、いつまでも熱きの

錦森閣藏

如し○衣服ハこの暑さ寒さの度を程よくそる爲めに用ふるものなり、○故に冬の日衣服をおゝく着る時ハ、我が体温を、まもりの冷氣に取られざるのみ、体のあたゝかみをよく保ちて、寒くなきなり○又夏の日裸にて居るよりも、程よき衣服を着たる方、暑くなきハ、体のまもりにある熱き氣の、我が肌に觸るゝをふせぐ故なり○この道理を手近く云へゞ冬の

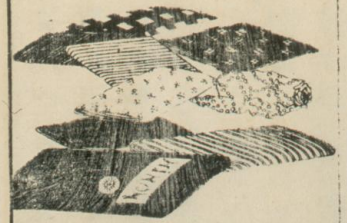
日たき立ての飯櫃を蒲團につゝみ置く時ハいつまでもひえず、又夏の日水のかさまりを同じく蒲團につゝむ時ハ久しくとけざるにて知るべし

○第十課

防護、放、凌、巧、深、首、縞、外、套

衣服ハ暑さ寒さ共防ぐ外に又外見を美しくよそをふ用あり○衣服につくる織物の中にて此二つの用を兼ぬるハ毛

織物なり○毛織物ハ寒き時ハ体温をよく護りて外に放さず、又暑き時ハ外より來る熱気ふせぎて我が肌に觸れしめず○故に夏の熱き日に絹、麻の類を着るよりも薄き毛織物を着たるかさ却て凌ぎよきものなり○まさこの



毛織物技巧乃に織り、美て〳〵く染る時ハ絹、木綿、麻よりも見事なり○毛織物の首なるものハ羅紗、フラネルなり羅紗に大羅紗あり、並羅紗あり、白羅紗、黒羅紗、縞羅紗、薄羅紗、などいろ〳〵あり○羅紗、フラネルを織るに用ふるハ何の毛なりや○羊の毛なり○汝ハ誰にそれを聞さるや○余ハ此本の巻の二の上第四課のところにて讀みさり○羅紗にてつくる衣服

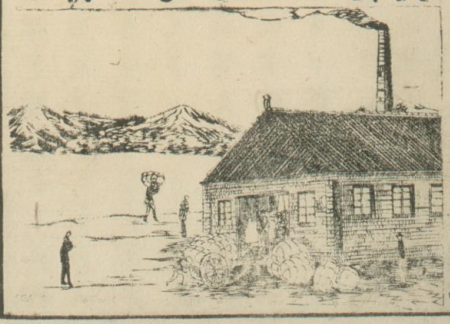
ハ何なりや○大小禮服、マンテル、背廣、ズホン、チヨツキ、外套などなり、まさ羽織、帽子、頭巾ともつくる○フラネルハ多く冬の肌着となす○フフネルの地を木綿ともしさるば綿フラネルといふ

○第十一課

防、價、般、比、邊、眞、岡、結、城、久、留、米、縮、巧、恰、獨、逸、印、度、精、便、發、

毛織物とつきて寒暑を防ぐとしろーきハ木綿ふり○木綿ハ絹、毛織物より品がらも美てしからず染上りもヨろしといへども地合の丈夫ふると、價の安きとまて世の中一般に用ひらるゝなり○又体の爲になることも絹、麻等に比ぶれば遙にまされり○我ゞ國にて木綿を織り出ず所甚ざかゝし中にも下野の眞岡木綿、下總の結城木綿、伊勢の松坂木綿、河内の河内木綿、出雲の雲州木綿其外薩摩カス

り、久留米ガスリ、阿波縮、銚子縮など皆其國國の名産ふり○金巾ハ外國にて機械にて織りさる木綿なり○此機械ハ蒸氣を用ひてまてすなり、その仕掛甚ざ巧みにして、初めに木綿ゝとの實の



まゝなるを機械にこくれで機械ハこの實綿ゝ不つーて打綿とー、其打綿ゝ直に機械のてさらきふて糸により、見る間に金巾を織り出だすなり其仕事の面白きを恰も「からくり」を見るゞ如し○此機械を巧みに用ふるハ外國の中にても英國、米國、獨逸、等其名高し、又さ其綿ハ多く印度より買ふものなり○かゝる不思議なる機械も皆人の考より出來さるものな

り故ゑ汝等もよく學問を出精して後々
ハかゝる便利の機械を發明し國の譽れ
をかゞやかすべし

○第十二課

晴、縮緬、紬、銘仙、博多、蠶、繭、芽、筵、籠、
眠、皮、求、拾、蛹、殺、繰、

絹ハ其地合の美てしきと、染上りのよき
とゑて昔より男女の晴着ゑ用ふ○絹の
中ゑて人のおゝく用ふるものハ縮緬、羽

二重、海氣、紬、太織、糸織、銘仙、博多、八丈の類
なり○絹ハ蠶の繭ゑ煮て取りさる糸を
機ゑかけて織りさるものなり○此事ハ
此本の巻二の上第四課ゑ言ひされど汝
等もなゝ不覺え居るならん○こゝゑ蠶を
飼ふあらましをいてゞ四月ゑ桑の葉の
芽ざそころ「たね紙」をあさゝめて蠶ゑこ
へらせ、それを筵ゑとり、籠ゑひろげ、桑を
あさへて養ふなり○蠶おひしく大きく

なれど初眠、二眠、三眠、四眠、とて四度の「眠り」といふ事をなす、又これを「休み」ともいふ、是れ蠶の皮のぬけこのはる時節なり○第四の眠より起きて後蠶ハ籠の外まてひ出でゝ繭をつくる所を求む、此れをヒキコともズウともいふ、それを

拾ひてマブシまハ入れ繭をつくらしむ○此繭より糸を取るまハ、日光まハ不一上ゲ或ハ蒸氣まて蒸して蛹を殺し、其後煑て糸まハ繰るなり○我ゞ國まて養蠶まハ名高き場所ハ福島、宮城、群馬、埼玉、長野、栃木等の諸縣下なり

○第十三課

役麗、儉約、守、費、忽、繁昌、奢、

ゝづこのまハる糸くず、紙切れ、の類まてもみ

ごりは棄つべからず、古への賢き人ハ一寸の糸くず、半枚の紙切れ、も皆大事はたくわへ置きて入用ある時の役は立させさり○子供の時より、糸くず、紙切れ、の類を麁末はしつくる時ハおとふは成りても其くせ失せずして萬事は

つけ儉約といふ事の出來ぬものなり○人として儉約の方を守らず、みごりは金錢を費やし、おごりは長するものハたとひ幾萬圓の身代ありとも忽ちつぶるべし○學問の修業をし、商賣を繁昌はし、田地をふやし、仕事を手廣くするも、金錢のあさこのならねば成り難し、金錢をあさこはするハ儉約を守りて無用の奢をせざるより外の法なし○故は人ハ子供の時

より儉約を行ふべし、儉約を行ふハ前ゑいへるごとこの糸くず、紙切れ、の類を大切ゑする事よりてゞむべし○左ゑ糸くずと、紙切れを大事ゑせし昔の賢き人の物語を語り聞のすべし

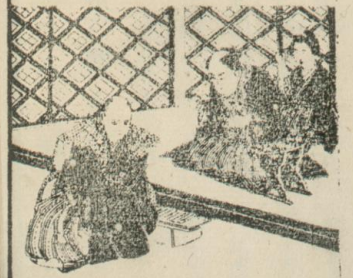
○第十四課

大炊頭利勝、預惜、朝、脇差、緒、腰、銭、
僅苦勞、構、感、買、戒、

むかし土井大炊頭利勝といふ大名ゐり

○ある時居間ゑ落てゐさる短き糸くずを拾ひ取り、其家來の大野といふ者を呼びこの糸を其方ゑ預くるゐ五、大切ゑ仕舞ひおくべしと云ひ附けたり○其ごきゑ居さる者ハひそかゑ笑ひ大名のくせゑあれ計の糸を惜しがるハ、けちなる人うなと嘲りけり○夫より三年ゐど立ちて、ある日利勝のさして居られし脇差の下緒のさきゞゐどけたり○其時利勝、大

野を呼びて。先年其方まあづけさる糸くずをくれよといひされど、大野ハ腰まつけさる袋より取り出ざして差上げさり○利勝ハ其糸まて下緒のかどけさる先を結び、扨他の家來どもま向ひて曰く先年此糸を我ゞ大野ま預けし



を、其方どもハ笑ひされども、見るべし、あの糸まて今日これざけの用をふしたり」又この糸ハ僅ゞなるものなれども、其初め百姓お蠶をかひ繭をとり、さまゞの苦勞をして出來上りさる物と思へば此れ程の物まてもみざりま棄つるハ宜しからず」扨大野ハ他の者の笑ふまも構てず、主人の云ひ附けをよく守りて、この糸くずを仕舞ひ置きしハ感心なり、褒美とし

て三百石を加増すべし」あの時其方ども
ハ余程けちなる人と云ひしぞ今此糸く
ずを三百石ゑ買ひ取りさるハ、けちなる
人でハあるまじ。と笑ひ且つ戒められた
りといふ

○第十五課

卿召仕、製、端、唇、變、辛、殿、逃、堪、喻、親、

水戸の黄門光國卿ハ紙の用を貴ぶれ僅
ゑの紙切れゑても大切ゑせられし人な

り○ある時その召仕ふ人々の中ゑ紙を
麁末ゑせし者ある伐見玉ひて冬の日の
寒きあけ方ゑ紙を製ゑる所伐見物して
來れ。とて見せゑやられけり○この人々
ハ、製紙の業ハどのやうゑ面白き事やら
ん、と紙すき場ゑ往て見しゑ多くの男女
ぞ寒風ゑさらされなぞら手足を水ゑひ
さし紙を製し居たり○この人々ハ此さ
まを見るより早くひえと不りて後ゑハ

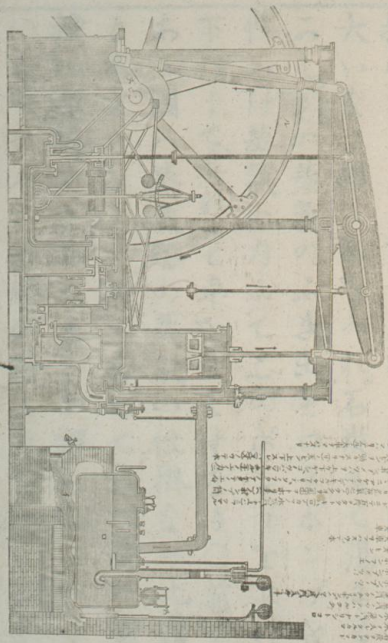
唇の色も變るまでこゞえ足なゝき、辛くして御殿へ逃げ歸れり○光國卿此事伝聞きたまひ。汝等ハ唯見てゐてさへ寒くして堪へぶさき事、其場ゝ働きて紙を製する者の苦みハ、どれ程なるべきや、此れを思へば僅二なる紙切れなり

とも麁末ゝそべこのらずと喻されけり○この人々も紙を製する事の苦しさ伝親しく見て大いゝ感ド其後ハ半枚の紙切れをも大切ゝしさりといふ

○第十六課

湯氣鉢、烟、噴、解、鑵、照、運轉、譯、箇、

此前ゝ蒸氣車、蒸氣船の事伝語り、又石炭の事をもいひされど汝等ハ既ゝ其あらましを知りさるならん○今こゝゝてハ



蒸氣の話を少しく語るべし○蒸氣とい湯氣の事なり、火鉢にかけさる鍋瓶の沸へる時口より出づる白き烟ハすなハち蒸氣なり○この蒸氣を多く集めて一度に噴き出さする時ハ蒸氣車、蒸氣船の如き大いなる重き物杖も動かすなり○この蒸氣車、蒸氣船につかふ蒸氣の仕掛ハ甚だ入り組さるむづかしきものなれどもよく考ふれば解らぬ事なし○其仕

掛のあらまーなる云ふ時ハ、蒸氣罐といふ大いなる罐ゑ水を入れ、石炭ゑて湯ゑこしし、その蒸氣のふき出を口ゑポンプを仕かけ、蒸氣の力ゑてこのポンプを上げ下げーて、其れゑて車をまたすなり○前ゑある圖ハ蒸氣船の蒸氣の仕掛なり、此圖と本文とをよく照り合せて見る時ハ機械の運轉するあらまーの譯を知るべー○をべて人ハ子供の時より箇樣の機械

まゝ目をとめて發明の力を養ふべし、既まこの機械の仕組を發明せしイギリスのワットといふ人ハ子供の時より蒸氣の力を試みて成長の後この大發明をしゝりといふ

○第十七課

飛脚、郵便、帆、上海、堺、費、會、肩、背、腹、洞、隧、

軍艦まも飛脚船まも皆蒸氣ばしにつけゝり○通例蒸氣船といふハこの飛脚船の事なり○飛脚船を又郵便船ともいふ、此れいつ幾日何時の出帆と時日をきめて郵便物の運送をなすが故なり○我が國の郵便船ハ横濱より神戸、下の關、長崎、夫より清國上海の間を往來し、又横濱と函館、横濱と四日市の間をも往來す○外國の郵便船まて我が國まに來るものハアメリカ。イギリス。フランス。なり○蒸氣車ハ東京

と横濱との間にあり又大津より、京都、大坂を經て神戸にも往復す、堺にも鐵道あり○東京の上野より上州高崎へかゝる、又陸奥の青森までかゝる線路ハ日本鐵道會社の仕事なり○鐵道の利益ハ甚だ多し、たとへゞ東京より横濱

に赴くに昔ハ一日を費しされども今ハ一時間にて行くを得べし、又山國の産物を都會の地に出だすに、人の肩、馬の背にて運ぶに及ばず、直に汽車にて運送する事得る等なり○鐵道ハ山道にかくるに山の腹に洞道をあけ其中を通すなり、この洞道ハ隧道といひ、又トンネルともいふ

○第十八課

刻誘限認

松二郎より鶴吉のもとへ一通の手紙をよこしたり其文に曰く

以手紙申上ハ明日ハ日曜にて学校も休暇に付兄と同道にて上野にまゐり夫より汽車にて飛鳥山へ赴き花見いたすべくと存じ貴兄にもさしつかへなくハ同行いたされ度否やハ返事を待ハ以上

四月十五日　松二郎

鶴吉様

猶〻兄よりもよろしく申上ハ

鶴吉ハこの手紙を見て左の返事をおくりたり

以手紙お見仕ハ然ル明日ハ兄様ハ同道にて上野飛鳥の花見なされハ上〻右と付私をもさそひたされ難有ぞんじ幸ひ用事も無ケレハと存じ供て仕ハ以上

四月十五日　　藤吉

松二郎様

猶く日兄様へもよろしく申上ケさるべくハ

この二通の手紙ハ文章ハ上く出來されども要用の事ハ書き落したり○汝等ハそれハ見出さゝ得るや○この手紙ハ、家ハ出づる時刻なし、又いづれより誘ふべし、といふ事をも落したり○故ハ松二郎ハ鶴吉の手紙を得て後、又「刻限」と「此方よりさそふ」とこの、又「そなさより御出向き下され」とこの打合せハせざるを得ず○そべて手紙ハ書く時ハ書き終りて後一度二度讀みこのへしかゝる要用の事を落さぬやうハ氣ハつくべし○汝等試みハ前の手紙ハ「時刻」と「誘引」の事を書き加へ見よ、其文言ハ

（松二郎の方）　午前八時より

（松三郎の方）若し字を知らざる道順を付紙方より発出でて字（鶴吉の方）尤も道順を付刻限までを記方より手紙を送べし

等の類なり○本文のあとに「猶々」と書きさる共「猶々がき」といふ此れハ認むる方大いによし

○第十九課

盛、咲、梢、敷、勉、骨、暮、鬼、眼、摘、菜、芹、莖、形、

今ハ花盛のもなごなり○こなさの枝ハ咲きみちくいまゞ散りをゞめず○かなさの梢ハ散ぶさなれども色ハ猶美なし○木の下にハ老いさる人若き人等打まゞり、むしろ共敷きゞりごを開き花を見て樂み居れり○此れ等の人々ハ皆平日職業共勉強をる故に今日ハ其骨折を休めんとて、こゝに來り、思ひ〳〵に遊び戯れて、面白くこの一日を暮らそなり○見よ、向ふにハ男の兒ゞ集りて「鬼渡し」を始めさり○其とき「ハ眼ゞくし」をするも

あり○こなさまハ女の兒ゞ打むれて摘草をなし居れり○其つむ草ハ何々なりや○よめ菜、たんぽつくし芹の類なるべし○摘草ハ体の運動ゝたもくさのみならず莖の生ひ立ち、花のありさま、葉の形、ふどゝ氣を附くれば自ら

植物學のいとぐちを知るものなり

浴　鄭洲書
河田眞爾　画
專田鉞太郎　開刻

明治十九年六月十一日版權免許
仝　廿年二月十七日訂正再版御届

（定價　一ノ上　二錢　一ノ下　七錢　二ノ上　三錢　二ノ下　九錢　三ノ上下　各九錢　四ノ上下　各拾錢）

撰者　東京市四谷區坂町百六番地　塚原苔園

版權所有者　大阪市東區南久宝寺町四丁目九番屋敷　前川善兵衛

發行兼印刷者　東京市日本橋區馬喰町二丁目　賣捌所　興文社

版權所有
前川善兵衛